

第3回遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会 (議事概要)

1 日 時：平成19年6月5日(火) 10:00~12:20

2 場 所：農林水産技術会議事務局 委員室

3 出席者：委員(別紙参照)

4 議事概要：

日本たばこ産業株式会社、住友化学株式会社、シンジェンタシード株式会社及び日本モンサント株式会社からのヒアリングが行われました。検討会での主な発言は以下のとおりでした。

1. 基礎研究

- ・イネゲノム解析の成果は、野菜、トウモロコシ等の育種にも利用しており、遺伝子組換えだけでなく、マーカー育種など従来育種を補う形で今後の研究開発を進めるために有用。
- ・有用遺伝子の探索の他に、その遺伝子をきちんと発現させる技術が重要。

2. 実用化研究

- ・バイオマスについては、開発した遺伝子組換え作物を燃料化するための加工処理技術が重要。国際的にバイオ燃料の開発が活発に行われているが、材料開発と加工処理が結びついていない状況。

3. 企業戦略

- ・有用遺伝子の探索は、遺伝子組換え作物の開発企業間でも競争が激化し、ベンチャー企業や日本の大学とも連携を進めており、重要な位置づけ。
- ・開発技術のロイヤリティだけでは企業経営は成り立たない。遺伝子組換えは、すぐには販売に結びつかないが、将来的に重要な技術であり、日本国内で種苗ビジネス等が発展することが理想。

4. 安全性評価にかかる制度

- ・遺伝子組換え農産物の安全性評価については、ある国で承認されれば、他国でもある程度審査を簡略化して承認するなど、国際的な調和を目指す必要があるが、一方で、我が国と米国とでは、遺伝子組換え農作物の安全性評価の制度やその経緯が異なり、日本ではまだ過去の実績の積み上げが米国に比べて不足。

5. 国民理解

- ・我が国の現状では、民間企業が遺伝子組換え技術を使ったら買ってもらえない懸念がある。消費者に心配なく買ってもらえる状況を作ることが必要。
- ・遺伝子組換えのメリットをどのように国民に理解してもらうか。ひとつは、農業経済性（農家メリット）を明らかにすることであり、日本の農家では高齢化対策として省力化が求められている。一方消費者にとっては、機能性・栄養成分など目に見えるものでないと理解されないのではないか。

(別紙) 委員の構成

(五十音順、敬称略)

有田 芳子 主婦連合会環境部長

石井 茂孝 キッコーマン株式会社顧問
(財)野田産業科学研究所副理事長兼専務理事

内宮 博文 東京大学分子細胞生物学研究所教授
(財)岩手生物工学研究センター所長

貝沼 圭二 農林水産技術会議委員
元 国際農業研究協議グループ(CGIAR)科学理事会理事

小池 一平 全国農業協同組合連合会営農総合対策部長

篠崎 一雄 (独)理化学研究所植物科学研究センター長

武田 和義 岡山大学資源生物科学研究所所長
日本学術会議会員

田畑 哲之 (財)かずさDNA研究所副所長

廣塚 元彦 不二製油株式会社研究開発本部フードサイエンス研究所所長

三石 誠司 宮城大学食産業学部教授

山本 和子 フリージャーナリスト
(有)農業マーケティング研究所所長